

将来都市構造の基本的な考え方（素案）【概要版】

■ 将来都市構造とは

将来都市像の実現に向けて、本市が目指すべき都市空間の骨格を概念的に示すもの

1 将来都市構造の方向性

総合振興計画基本構想では、3つの将来都市像を定めており、都市空間の形成に当たっては、将来都市像の実現に向けて、以下の視点に沿った取組が求められます。

将来都市像	都市空間を形成する上で求められる視点
多彩な都市活動が展開される東日本の交流拠点都市	・拠点性の向上 ・交流の活性化
見沼の緑と荒川の水に象徴される環境共生都市	・自然環境の保全・活用 ・都市活動の低炭素化
若い力の育つゆとりある生活文化都市	・安全で安心できる生活環境の形成 ・生活基盤の充実 ・質の高い生活環境の形成

一方で、本市においても中長期的には人口減少・超高齢社会が到来すると予測されます。そのような中、市街地が拡大を続ける従来型の都市づくりを進めた場合、以下のような問題¹が発生すると考えられます。

- 日常の買い物や通院に際して、自家用車の運転ができなくなるにより、不自由な生活を強いられる高齢者等が増大
- 都市機能が拡散、散在することで、自動車利用の一層の高まりや移動距離の増大等により、CO2 排出量が増大し、環境への負荷をより高めることが懸念
- 広域的な都市機能の拡散は、中心市街地の一層の衰退を招くばかりか、「まち」の質の低下と防災、防犯、子育て環境等、多様な問題が増大
- 市街地のさらなる外延化は、都市機能の維持管理、福祉サービス等の行政コストの増大を招く恐れ
- モータリゼーションの進展は、日常生活における自家用車の依存を高め、利用者の大幅な減少に伴う公共交通機関の減便や廃止が進み、市民の足としての公共交通の地位は大幅に低下

本市が目指す将来都市構造

市街地の拡大を抑制し、各地域の拠点への様々な都市機能の集積と拠点間のネットワークの形成を図ることにより、市民生活に必要な諸機能が徒歩、自転車又は公共交通で移動できる範囲において享受できる環境を創出するとともに、将来的にも市街地が河川と緑地に挟まれた都市空間を保全していくことで、質の高い市民生活を支え、多彩な交流を生み出す活力と豊かな自然環境が共生する「多核集約・連携型の都市構造」の実現を目指します。

2 将来都市構造を構成する要素

(1) 拠点

現行計画を踏襲し、2つの「都心」、4つの「副都心」及び「地域拠点」で構成する。

- ・都心・・・大宮駅周辺・さいたま新都心周辺地区と浦和駅周辺地区
- ・副都心・・・日進・宮原地区、武蔵浦和地区、美園地区及び岩槻駅周辺地区
- ・地域拠点・・・鉄道駅周辺及び区役所周辺

(2) 都市軸

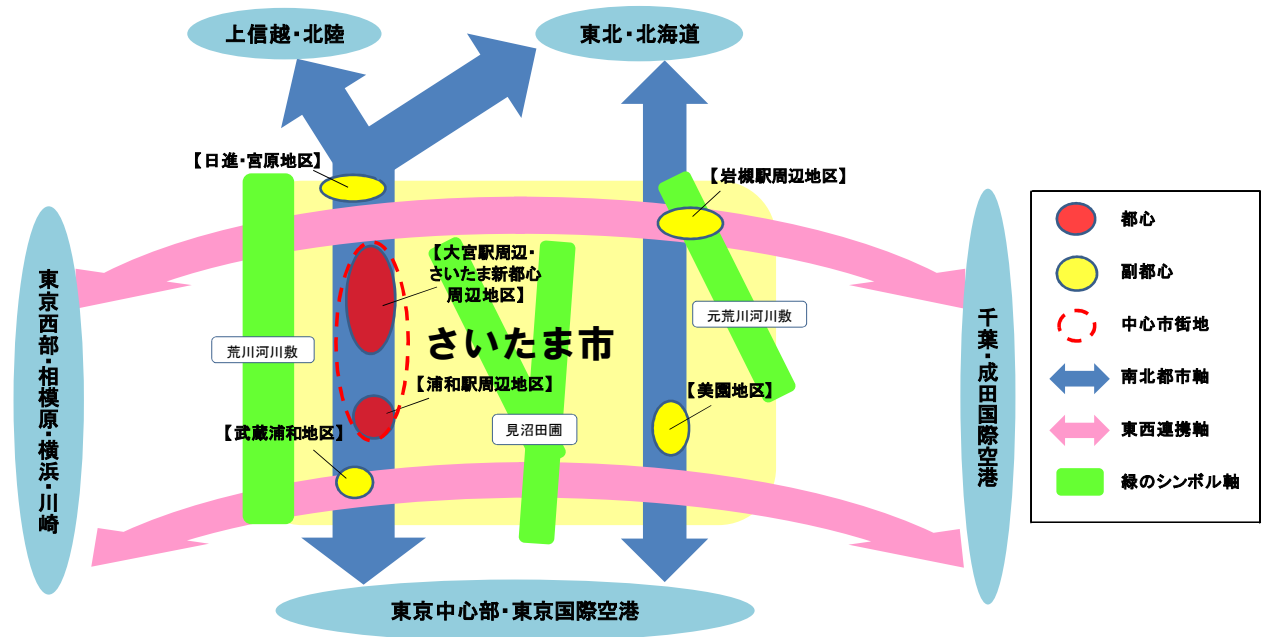
広域的観点から、広域的な幹線道路や鉄道に沿って、設定する。

「南北都市軸」：本市の都心・副都心と東京中心部、北関東・東北地方や上信越地方とを結ぶ南北方向の2つの軸で構成

「東西連携軸」：東京中心部から環状方向に位置する拠点的な都市と本市とを結ぶ東西方向の2つの軸で構成

(3) 水と緑のネットワークの骨格

市内を流れる河川と河川沿いの低地に広がる農地は、本市の貴重な環境資産であり、都市構造上の重要な構成要素として位置付け、河川沿いの低地帯に緑地を維持し、将来的にも市街地が河川と緑地に挟まれた都市構造を維持します。



3 土地利用の基本方針

■ 土地利用に関する基本的な考え方

- ・鉄道などの公共交通の利便性の高い市街地における集約的な土地利用
- ・自然的土地利用の維持・保全
- ・原則として、新たな市街地の拡大を抑制

¹ 国土交通省都市・地域整備局「集約型都市構造の実現に向けて」（平成 19 年 8 月）